

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫 ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



ハワイ大学名誉教授の西山和夫先生は、日米間のビジネスをテーマにした異文化コミュニケーションの先駆者です。昭和51（1976）年にハワイを訪れた佐野きく枝先生と出会い、後には神田外語大学異文化コミュニケーション研究所の客員教授を務められました。「アメリカ人に正しい日本を伝える」という信念のもと、半世紀以上にわたり、ハワイ大学を拠点としてご自分の使命を貫いてきた西山先生を訪ねました。

私は昭和8（1933）年に茨城県結城市で生まれました。結城紬の織元の長男です。終戦のときは12歳でした。英語が大好きで、NHKラジオの“Come, Come, Everybody”で学んでいましたよ。高校生のときには英語熱が高まって、友達とも道端でも英語で話すくらい熱中していました。高校生になると、スイス人宣教師が開いた教会に通い、英会話を学びました。そこで、私はクリスチャンになりました。

高校3年生のときに、英語が校内で1番になり、どうしても大学に行きたくて入学願書を取り寄せました。でも、13人兄妹の長男だったから、父は許してくれなくてね。商売人だった父は「金さえもうければ、東大の卒業生でもアゴで使える。金もうけが人生で一番大切だ」と。願書は晩酌の場で破り捨てられました。





高校卒業後は、神田にあった村田簿記に入学しました。結城から汽車で片道3時間かけて通いましたよ。月・水・金の週3日間だったから、残りの3日間は定期券を使って、千駄ヶ谷の津田英語塾に通った。父には内緒でね。学校を卒業してからは4年間、家業を手伝いました。仕入れた反物を担ぎ、東京や熱海、沼津の呉服店を訪ねる行商です。商売は人をだますのが当たり前の時代。5000円で買った反物を7000円で売るのに「8000円で仕入れたんですよ」と、うそをつく。教会で学んでいたキリスト教の教えとはまるで逆。あれはつらかったですね。

結局、家を飛び出しました。手持ちは母が持たせてくれた3000円だけ。東京の神学校で1年学んだ後に、千代田スクールオブビジネスの3年に編入しました。ある先生が、「パンナム（パン・アメリカン航空）でふたつのポジションを募集している」と教えてくれました。試験会場に行くと200人も受験者がいました。神学校では宣教師の通訳をしていたので、英語を話し、聞くのは問題なかったのが合格できました。うれしかったですよね。落ちたら父のもとに帰らなければならなかったから。

(1/8)

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫
ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



**エリート社員から雑用係へと転落
でも、勉強したい一心でバイトを続けた**

パナナムに入って、最初は貨物課に配属されましたが、英会話がよくできたので旅客課に移してもらいました。私はパナナムで日本人初のマネージャーになろうと決意した。でも、そのためには完全なバイリンガルにならなくちゃいけない。それで昭和35（1960）年、9カ月間の無給休暇を取って、ハワイ大学のマノア校に留学しました。27歳のときです。2学期間だけの予定でした。専攻はスピーチ・コミュニケーションです。

最初の学期で成績がとてもよかったんです。すると、留学生相談室のスミエ・マケイヴ先生が「カズオ、学生課で奨学金を取りなさい」と助言してくださいました。次の学期からは奨学金をもらいました。ワイキキのホテルでハウスポーイのアルバイトもしましたね。トイレが詰まれば真空ポンプで直して、プールサイドの汚れたタオルを片付ける。1時間1ドル52セント。パナナムのエリート社員から雑用係に転落です。でも、勉強したい一心でバイトを続けました。

ハワイ大学に入学した直後、マケイヴ先生の部屋を訪れると先客がいて、何やら相談をしていました。彼女は中国系ハワイ人で「ハワイ教育者大会でスピーチをしてくれる日本人留学生を探している」という。すると先生は「適任者がいます。カズオです」と言って、その場で話が決まった。それからはスピーチ原稿の作成です。マケイヴ先生に「あなたは英語会話は上手だが、文法はとんでもない」と言われながら、何度も書き直しました。当日は副知事をはじめ1000人ぐらいの前で話しましたが、スピーチがうまくいって、自分の存在がハワイの教育界で知られるようになり、たくさんの友人に出会うことができたのです。





結局、パナナムを辞めて、そのまま大学に残りました。学びながら、ワイキキにある日系人が経営する旅行会社でもマネジャーの職を得ました。ハワイから日本に観光団を連れていく旅行会社です。卒業後も、その会社で仕事を続けました。結婚もして、子どもも生まれました。でも、給料を上げてくれる様子は一向にない。そんなとき、マケイヴ先生のお友達で、本願寺ミッションスクールの校長を務めていた田中先生に、「西山さん、こんな仕事をしていたらもったいない。大学に戻って勉強して、高校の先生になって、日本語と日本文化を教えなさい」と言っていただきました。それで大学院に入ることにしたのです。(2/8)

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫 ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



**本当の日本と日本のビジネスを
紹介できる人間になろうと決意した**

大学院でもスピーチ・コミュニケーションを専攻しました。大学院生には学部生が大講堂で受ける授業を補佐する仕事が義務づけられていました。ネイティブの学生を相手に指導したのですが、私の評価はまるでダメでしたね。「ジャパンボーイが、なぜアメリカ人にスピーチを教えられるのか？」と。学生にしても大学院生の補助教員を批判することで自分の評価を高められますからね。でも、ある方にこう言われたんです。

「西山、砥石を知っているか？ 砥石はあんなに汚い石だけど、刀を磨けるんだ。おまえは砥石になれ！」とね。私にはスピーチの知識がある。その知識で学部生たちを磨くんだと気づきました。



実は、最初にスピーチ専攻の大学院に入学を申し込んだとき、当時の学部長には「あなたには日本語のアクセントがあるからスピーチの先生は無理だよ」と断られたんです。でもその後、学部長が変わって入学を認められました。その学部長の薦めでたくさんの先生方に会いました。ハインバーグという先生はこう言ってくれました。「ニシヤマ、日本語のアクセントがあるってことは、日本語ができる証拠だ。劣等感なんて感じるな！」と。本当に多くの方々に励ましていただきました。そういった出会いがあったから、今の自分があるのです。



大学院時代にもうひとり大切な方との出会いがありました。ミネソタ大学のウィリアム・ハウエル先生です。当時、最先端だった異文化コミュニケーションの分野で先駆的な教育をされていた方です。ハウエル先生は私に会うと、「君のような人柄のよい日本人に出会ったことはない。カズオ、教授にならないか？」と言ってくれました。まだ大学院に入ったばかりの私はその言葉に驚くばかりでした。

1960年代後半の当時、正直なところ、アメリカ人は日本人をばかにしていた。元新聞記者のアメリカ人が書いた本には「日本のビジネスマンは酒を飲んで、冗談を言って、暴れる。ビジネスのやり方はとんでもない」と書いてありました。私は、本当の日本と日本のビジネスを正しく紹介する人間になろうと思うようになっていました。それは、日本とアメリカのどちらの文化もビジネスも理解している自分にしかできない。だから、ミネソタ大学で博士号を取り、異文化コミュニケーションの専門家になろうと決意したのです。(3/8)

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



「日本に帰ったら必ず来てください」 その言葉が神田外語との出会いです

博士号は2年4カ月で取りました。月曜日から土曜日まで、早朝から深夜まで勉強をしました。友達からは「地藏」と呼ばれていましたね。本ばかり読んで動かないからです。博士論文のテーマは日米合併企業の研究。日米ビジネスコミュニケーションです。とてもニッチな分野だけど、西山和夫にしかできないという自負はありました。ミネソタ大学があるミネアポリスは工業都市で、後の住友3Mなど日系企業もビジネスをしていたので、研究にはちょうどよかったですね。博士論文のタイトルは『合併企業と日本企業における意思決定のプロセスとコミュニケーション』です。



昭和45（1970）年、博士号を取った私はハワイ大学に戻り、スピーチ・コミュニケーション学科の准教授として教え始めました。この准教授時代に神田外語学院の佐野きく枝先生に出会いました。昭和51（1976）年です。当時、日本からの来客があると、学長に頼まれて通訳をしていました。あるとき、神田外語学院の先生方の一団がハワイを訪れました。ハワイでの英語教育の視察です。その一環として、大学に隣接する東西文化センター（East West Center）で研修会が行われました。ハワイ移民カンファレンスセンターの2階にある「アジアルーム」です。研修会では、通訳を引き受けて、私自身も講義を行いました。



すべての研修が終わると、佐野きく枝先生が私のもとにいらっしゃいました。そして、「日本人でありながら、アメリカの大学でスピーチの先生をしているなんて素晴らしいことです。日本に帰ったら必ず神田外語に来てください」と言っていただきました。それが神田外語との出会いです。

それから毎年、日本に帰るたびに、神田外語学院を訪れるようになりました。一度、日比谷公会堂での入学式にも呼んでいただいたことがあります。会場に行ってみると、舞台に大きな垂れ幕が掛かっています。そこには「ハワイ大学准教授 西山和夫先生」と書いてある。席に案内されると、隣には東京外国語大学の学長の小川芳男先生、そして国会議員の鳩山威一郎先生がいらっしゃいました。私はまだ40代です。とにかく、そのスケールに驚きましたね。私自身も3000人以上の新入生たちの前で挨拶をさせていただきました。(4/8)

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



相手の文化から物事を見る力を
学生に身につけさせたいと真剣だった

佐野きく枝先生は、とても頭のよい方でした。人を見る目がありました。そして、学院長だった佐野公一先生のよき相棒でしたね。あるとき、学院のエレベーターに乗っていると、外国人の女性教員が真っ赤な口紅をしていました。すると、公一先生はその場で教員を怒鳴りつけるんです。きく枝先生は、そんな公一先生を「まあ、まあ」となだめて、その女性教員には公一先生が怒鳴った理由をきちんと説明されていました。非常によいコンビでしたね。

言葉を学び、文化を学ぶ。バイリンガルになって、相手の文化から物事を見られるようになる。佐野公一先生、きく枝先生は、とにかく真剣に、学生たちにその力を身につけさせようとしていました。

おふたりは終戦後、進駐軍が日本に入ってきたときに、「日本人は英語を勉強しなくちゃいけない」と強く感じられたようです。戦時中、日本は敵国の言葉である英語を学ぶことを禁止しました。一方のアメリカは日本人を集めて日本軍の暗号解読をさせた。大きな違いです。公一先生は日本が強くなるためには、外国の言葉と文化を学ばなくてはいけないと思われていたのでしょうか。

もうひとつ、神田外語との大きな出来事は、佐野公一先生と雑誌『中央公論』で対談させていただいたことです。公一先生は対談のなかで、「教育には『波長』を合わせる事が大切だ」と力説されていた。私も同感でした。コミュニケーションの本質です。大学の授業でも、教員が学生と真剣勝負で向かい合って、波長を通じ合わさなければ真の教育はできません。





「波長を合わせる」というのは異文化コミュニケーションの本質です。英語で "Cultural Empathy" という言葉があります。アメリカ人と話すときは、アメリカの文化に入り、その文化的習慣から物事を考え、コミュニケーションをしていきます。文化的な共感ですね。ビジネスの現場でも大切です。日本人のマネジャーは、現地のスタッフとうまくいかないときに、すぐに「日本では」とか「日本人の場合は」と言ってしまう。でも、相手はアメリカ人。両者のズレを修正しなければ、いつまで経ってもコミュニケーションは成立しないのです。(5/8)

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫 ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



**日本人はアメリカ人にどう映っているのか？
参加者と議論をした異文研の夏期セミナー**

その後、神田外語大学設立の計画が始まりました。私も声をかけていただきましたが、ハワイ大学と終身雇用契約を結んでいたし、妻が日系2世で日本語は話せるけれど、日本で生活するのは無理だったのでお断りしました。昭和53（1978）年には佐野公一先生がお逝去され、昭和63（1988）年にはきく枝先生もお亡くなりになった。次第に神田外語とのご縁も薄くなっていきました。

しかし、縁というのは不思議なもので、神田外語大学の開学の数年後に、久米昭元さんが教授に就任し、異文化コミュニケーション研究所の副所長を務められ始めました。久米さんは、私の教え子なんです。ハワイ大学の大学院に留学しているときに私の講義を受けて、日米合併企業の研究に興味を持ち、私と同じミネソタ大学でハウエル先生の指導のもと、博士号を取りました。

平成5（1993）年6月には、異文化コミュニケーション研究所に声をかけていただき、神田外語大学で講演を行いました。テーマは、「日米ネゴシエーションにおける認識ギャップ」です。その後、平成12（2000）年にハワイ大学を引退して、名誉教授に就任したのですが、その年の9月からは、異文化コミュニケーション研究所の客員教授として神田外語大学に招いていただきました。



異文化コミュニケーション研究所は、福島のリティッシュヒルズで夏期セミナーを行っていました。私も来日した平成12（2000）年9月に開催されたセミナーに参加し、ワークショップを担当しました。テーマは「国際ビジネスにおける日本人とアメリカ人」です。私はアメリカの新聞などで報道されている日本人像を紹介しながら、経済発展を遂げている日本と日本人ビジネスマンがアメリカ人の目にどのように映っているかを解説しました。日本人の実像を情報発信し、アメリカ人のステレオタイプを変えていく必要があることを参加者と議論したのです。

神田外語大学の後期が始まると、客員教授として異文化コミュニケーションやパブリック・スピーキング・コースの授業を担当しました。帰国子女の学生たちが熱心に勉強していたのが印象的でした。また、大学や学院で講演会も行いました。テーマは「アメリカから見た日本 日米関係の問題点」でしたね。（6/8）

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫 ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



**正しくあるために、とにかく考える
正しいことは必ず通ります**

ハワイに来てから53年。私はアメリカ人に日本に対する正しい認識を持ってもらえるように努力してきました。それが私の使命です。ハワイの観光業界向けに日本人の観光客を正しく扱うための本を書き、企業のコンサルティングもしました。でも、それはお金のためじゃない。日本とアメリカの関係づくりに貢献したい。その一心だったのです。

私は物事をはっきりと言うタイプの人だから、ずいぶんと嫌われもしましたね。でも、「正しいことは、正しい」という信念は揺らぎませんでした。1980年代、日米貿易摩擦によってジャパンバッシングが起きたときも、真っ向から反論しました。だって、いわれのないバッシングなのですから。

平成19（2007）年にはハワイでの不動産投資に関する本を出版しました。日本語と英語のバイリンガルです。ハワイで不動産投資を考えている人に正しい知識を得てほしいという想いで書きました。この本が出て都合が悪い会社もあると思いますよ。だって、日本人は日本語が分かる不動産仲介業者に相談するが多いけれど、そういった業者が決してアメリカの法律やハワイの土地に関する規制に通じているわけではないのですから。日本人にはだまされてほしくない。だから書いたんです。





正しくあるためには、とにかく考えることです。分からないことがあれば、まず考えてみる。インターネットに頼らずにね。そうすればおのずと正しい答えが導かれるはず。そして、正しいことは必ず通ります。

私はハワイ大学1年生のときに、「アメリカが日本の真珠湾攻撃を非難するのならば、アメリカ人は広島と長崎についてきちんと考えなければならぬ」と主張したことがあります。友人には、「西山、強制送還になるぞ」と言われましたが、そんなことは起こりませんでした。正しいことを主張する権利を認める。私はそんなアメリカが好きです。(7/8)

異文化理解教育の先駆者たち

第2回 西山和夫 ハワイ大学名誉教授
正しい日本を伝えるために



外国の文化と言葉を体験として学び
真の国際人になってほしい

神田外語で学ぶ学生たちには、真の国際人になってほしいですね。そのためには、外国の文化にじかに触れて、体験を通して外国語を習得していく必要がある。日本人だけで行動せずに、現地のコミュニティーに飛び込んでほしい。

日本で有名な英会話の講師の方がハワイに来たときのことです。その方は、「独学で学んだけれど、僕の英語は完璧だ」と豪語されていました。食事をご一緒することになり、ホテルに迎えに行ったら、なんと草履をはいている。レストランでは、ひとりでは食べきれないディナーサラダを注文してしまって驚いている。それで英語が完璧だと言えるでしょうか？ 言葉は文化や生活習慣のなかで習得してこそ、初めて理解できたと言えるのです。

私はホテルビジネスの研究もしているから、80歳になった今も、香港、東南アジア、そして日本を旅しながら、自分の目で各国の事情を確認しています。体験でしか学べないことがたくさんありますからね。

日本人はつい日本を中心に物事を考えてしまう。プライドが高く、相手の国の文化を否定してしまう。でも、対等にコミュニケーションするには、互いに尊敬し合わなければならない。それには、相手の言葉や文化、歴史を真面目に学ぶ必要があります。日本人の勤勉さで、真面目に研究する。今後はさらに多文化社会になっていくから、複数の国について学ばなくてはなりませんね。



神田外語の学生たちには、ぜひ、正しい心を持ち、考える力を身に付け、そして外国の文化と言葉を学んで、真の国際人になってほしいですね。(8/8)

西山和夫 (にしやまかずお)

ハワイ大学名誉教授。昭和8 (1933) 年、茨城県結城市生まれ。パン・アメリカン航空を経て、ハワイ大学に留学。昭和45 (1970) 年、ミネソタ大学で日米合併企業について異文化コミュニケーションの視点から研究し、博士号を取得。以来、日米のビジネスコミュニケーションを専門に、ハワイ大学で教鞭を執り続けるとともに、ビジネスコンサルタントとしても活躍。平成12 (2000) 年9月から翌年1月まで、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所客員教授を務めた。